

漢民族の伝統から多様化へ

木崎 翠

漢民族の衣装

中国は数十の民族からなる国家であり、多くの少数民族は民族色豊かな各々の衣装を持っている。色とりどりの装飾を施されたそれらの衣装は、何らかの行事がある日にのみ着用される特別の衣装ではなく、日常生活で常に身に着けられている。しかしここでは中国の大部分を占める漢民族の衣装について述べる。漢民族の衣装とはどのようなものか。スタンドカラーで裾の割れたチャイナドレスが真っ先に想起されるかもしれない。しかし、これは正解とはしがたい。いわゆるチャイナドレスの原型は、北方の遊牧民族の服だ。だからこそ、馬にまたがりやすいように裾が割れているのであり、本来はかならず上衣の下にズボンを着用するものであった。

漢民族のもともとの衣装は、左右の衿を胸の前で重ねあわせる形式の衣服だった。中国古代の美人画でも思い出してみていただきたい。そのような衣服を纏った姿が描かれていたはずだ。ま

たそのような衣装の存在は、周辺民族である日本や朝鮮半島の民族衣装にその形式が今でも残されている点に見られるとおりである。ところが本家本元の漢民族は、そのような伝統的な衣装をいつのまにか北方の異民族のそれに文字どおり着替えてしまった。

本来、漢民族の文化はまことに生命力、普及力が強く、言語も文字も食事も社会制度も、何度かの異民族による支配にもかかわらず、衰退するどころか、普及の範囲を一層広めたことが知られる。しかし衣装に関しては、少し事情が違ふようだ。むしろ周辺民族の衣装に自らの衣装が取って代わられ、いつのまにかそれを自らの民族衣装のように扱ふようになってしまった。「着る」ことには、「食べる」ことほどには才能を発揮し得なかつた民族であつたのだろうか。

一方、労働着としての現代に至る漢民族の衣装は著しく実用中心のものであつた。漢民族の場合、冬の寒さの厳しい地域に相当分布しているため、衣装の重要な役割のひとつが防寒であつたこともあり、上衣とズボンで体を包み帯で締めるという、装飾が少なく実用的、簡潔なデザインであつた。生地に模様を染め抜くという伝統や技術も欠いていたようで、無地やせいぜい縞模様や帯の衣服が一般的である。中国の特産品として知られる藍染も、もとはといえば南方の少数民族の物であつて、漢民族の物ではない。

いわゆる「人民服」
に つ い て

現代の中国の衣装として想起されやすいのはいわゆる「人民服」である。これは中国では「人民服」とは呼ばれない。一般に「中山装」と呼ぶ。孫文、つまり孫中山が、日本の軍服などをモデルにしてデザインし、中国に

広めたものであることからこう呼ばれているのだ。中国における洋装の普及のひとつの形といえよう。「人民服」も輸入の文化なのである。この中山装、中国では少なくなつた、としきりにいわれるが、実際にはまだまだ町で多数見かける。特に、砂混じりの強風が吹き衣服の汚れやすい北方では、紺色や深緑色のこの衣装はなかなか合理的とも思える。

紺色や深緑色の中山装、と書いたが、中山装といっても実際には多様な種類がある。木綿の物から良質のウールの物まで、だぶだぶとして立体的に裁断されていないものからすつきりと体形にあわせてデザインされたものまで、などなど。そして、相手が身につけている中山装を一目見れば、そのタイプから、その人間が属する社会階層や所得水準が瞬時に判別できると言つて過言ではない。特に、上下にひと組みずつ合計四つポケットがあるタイプの中山装の着用は、「幹部」であることの象徴であ

都市・農村の1人当たり衣料購入・消費量(1991年)

品名	単位	都市市民購入量			農民消費量 ³⁾
		平均	困難 ¹⁾ 世帯	最高 ²⁾ 所得世帯	
綿布	m	0.97	0.68	1.68	0.90
綿花	kg	n.a.	n.a.	n.a.	0.33
化纤布	m	1.53	0.88	2.06	1.83
ウール布	m	0.28	0.13	0.48	0.09
紺布	m	0.35	0.15	0.54	0.05
綿衣服	着	0.31	0.20	0.42	n.a.
化纤衣服	着	1.66	0.97	2.09	n.a.
ウール衣服	着	0.21	0.07	0.37	n.a.
紺衣服	着	0.10	0.04	0.17	n.a.
ニット衣服	着	1.39	0.98	1.94	0.08 ⁴⁾

(注) 1) 2) 都市住民の所得を8段階に分けた中の最低層と最高層。3) 農村の衣服の購入は換算されて上半分に入っているものと思われる。

4) 毛糸を含む。

(出所)『中国統計年鑑』1992年版, pp. 287, 315より作成。

った。一九六〇年頃に中国を襲った飢饉を描いた中国の小説の一節に、ある農民が飢えに瀕して、今は穀物倉庫の番人になっているかつての戦友に穀物を分けてくれるよう依頼に行く場面がある。番人は農民の危機的状況を知らず、言う。「俺はポケット四つの幹部服を着ているから、作柄にかかりなく月十四・五キロの食糧は保証されている」(張一弓著「犯人・李銅鐘の物語」、邦訳は、辻康吾編『現代中国の飢餓と貧困』所収、弘文堂、一九九〇年)。ポケットの四つある服を着る身分は、飢饉のなかで彼の生命をも保証したのである。

服装の多様化 に 向 け て

ともあれ、中国の人たちの服装が近年とみに華やかになってきていることはしばしば報道されているとおりである。では現在の中国において、時と場合により服装はどの程度着分けられているのであろうか。まず、通勤着と室内着とについては、これを区別する習慣はまだ一般にはできていないようだ。夏などはオフィスでも服装は相当ラフで、中年男性でもショートパンツにサンダル履きで来客に会う。では晴れ着はどうか。結婚披露宴などでは、新郎新婦以外の参加者は特に晴れ着は着用しないようだ。服装の多様化の度合いと強く相関するであろう布・衣料品の一人当たり消費量の現状は別表のとおりである。布は衣料以外にもさまざまな用途に用いられる場合が想定されることから、服装の本格的な多様化は、都市部の高所得層の中でやっと緒に付いたばかりと言うべきであろう。

最後に、しばしば話題に採り上げられる中国女性の服装の変化について少々解説を加えておこう。基本的には下半身にはズボンを着用する文化であった中国だが、現在では若い女性の間にはス

カー트가普及してきている。ただし季節による変化は大きい。北京ではだいたいメーカーが境目で（このころの北京は既に初夏を思わせる暑さになってきている）、若い女性は一斉にスカートに置き替える。ただ四、五月のうちにはスカートの内側に原色のズボン下を穿き、それがスカートと同じ長さやそれを越えてくるぶしまでの長さがある、といった姿もしばしば目につく。真夏になれば若い女性はスカート一色となり、真夏に綿パンを穿いていて、「夏なのになぜスカートを穿かないのか」といぶかしげに問われた経験も筆者にはある。「夏は暑いからスカート、冬は寒いからズボン」という感覚が支配的といえよう。そして九月にもなればまた一斉にズボンに替える。最近では冬でもスカートを穿こうとする女性もごく一部に出てきたが、彼女らはスカートと同時に分厚いズボン下を重ね着している。極寒の北京の冬の涙ぐましいお洒落心といえようか。

所得水準の上昇によつて、中国の日常着は着実に多様化し、質も向上しよう。中国が近年、諸外国の衣料品の縫製下請けを各地で大量に行うようになっていくことが（直接的にはその製品の一部が国内市場に出回ること、間接的にはデザインや縫製技術が中国に伝わることで）、急速に一部の市民の衣料消費水準を引き上げている。外国の情報に接する機会の多い、都市若年高所得者層がその牽引力となっている。今後むしろ注目されるのは、それ以外の階層にどのような速度で衣料消費の変化がもたらされていくかであろう。その際には、もともと濃厚とは言いにくかった漢民族の衣装の伝統からは、さらに遠ざかる方向が指向されることになりそうだ。